人 ものがたり

イラストの力 Chikara

時代えぐる柔らかな筆

●ポスターデザイナー　秋山　孝さん(62)

1 伝える

柔らかな線、ポップな色使い。旅行雑誌「じゃらん」の表紙を毎号飾った作品で知られるポスターデザイナー秋山孝(62)＝長岡市出身＝。商業イラストの分野で成功を収める一方、環境問題や災害といった重いテーマを扱った作品も発表している。親しみやすいタッチの奥底に強烈なメッセージを秘めた作品は、現代社会が抱える問題をえぐり出す。イラストの持つ力を信じ、国内外へ発信を続けている。

（長岡支社・椿智彦）

骨格の一部を露出させた鳥がオレンジ色の空を飛ぶ。1986年にポーランドで開かれた第11回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレで金賞を獲得した「WILD LIFE−HELP」。秋山が初めて国際舞台で評価を得た作品だ。

80年代は酸性雨が世界的に注目を集めていました。ヨーロッパでは、屋外にある大理石でできた像などの文化財が酸性雨で溶けちゃうので大問題になっていました。もちろん日本でも、屋外の美術作品が影響を受けていました。

これは何とかしなければいけないと。酸性雨問題をポスターアートで訴えようと考えたときに、頭に浮かんだのが鳥の骨が空を飛ぶ姿でした。酸性雨によって体の一部を溶かされた鳥です。

背景には、危機感を表す色としてオレンジを選びました。鳥は緑。自然や生き物を象徴する色です。オレンジと緑は対比の関係にあります。並べると、それぞれの色の性質が強調されるんです。

そんなオレンジ色の空を半分白骨化した鳥が飛んでいる。「死が飛んでいる」というイメージを表現したかったんです。

70年代以降、公害や環境問題への関心が高まりました。東京の美術予備校に通っていたころ、水道橋を流れる神田川なんて本当にどぶ臭かった。下宿のちゃぶ台に、車の排ガスのすすなんでしょうか、砂のようなものがたまるなんて日常茶飯事でした。

時代の空気をどう伝えるか。そうしたテーマを追い求め、作品をつくり続けてきた。重いテーマを選ぶ一方で、筆運びは柔らかく、どこかユーモアさえ感じさせる。

描いたポスターアートは650点以上あります。僕は社会が失ってしまったものや、ないがしろにしてきたものに興味があるんです。そういうものを描いたポスターをつくりたい。だから新聞をはじめ、メディアから情報を仕入れ、社会の動きに敏感になる必要があると考えています。

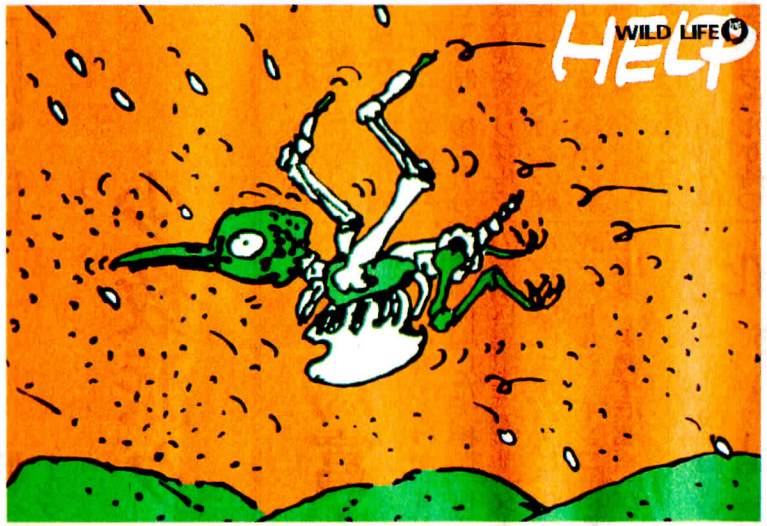
そうして生まれた作品は美的であると同時に、見る人の心に静かに入り込んでいくものでないといけないと思っています。

ただ、社会問題を訴えるとはいっても、あまりにストレートな表現だと見る側に拒否感が強まるのかなと思います。リアルで恐ろしいだけの表現では、人はおののくばかりで目をそらしてしまいますよね。だから抽象的に、例え話のようにしてイラストを描いていくんです。

（敬称略）

12回連載予定

「社会の問題を親しみやすく、人の心に響くように描き続けたい」と語る秋山孝＝長岡市宮内2の秋山孝ポスター美術館長岡



酸性雨をテーマにしたポスターアート「WILD LIFE−HELP」

あきやま・たかし
1952年、長岡市生まれ。長岡商業高校、多摩美術大学卒。東京芸術大学大学院修了。86年、第11回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレで金賞受賞。2000年から多摩美術大学グラフィックデザイン学科教授。09年には長岡市に秋山孝ポスター美術館長岡を開設した。東京都新宿区在住。